



VOL 75

発行 2021 年 6 月 30 日
 公益社団法人 日本山岳会 山岳地理クラブ
 URL ● www.jac.or.jp/doukoukai

シリーズ

分水嶺を越える県境・市町村境

—越境する山と溪— (2) 野反湖

富永 滋

群馬県の日本海側に属する区域には、尾瀬と共に野反湖が挙げられる。津南町大割野で信濃川に注ぐ中津川は、秘境秋山郷で新潟県から長野県に入り、水源では群馬県となって野反湖に達する。深山の溪流である中津川は、短区間で群馬、長野、新潟と三県を跨ぐ珍しい川である。野反湖は昭和31年に完成した発電用の調整ダムで、それまでは野反池と呼ばれる天然の池だった。現在は下流の発電施設とともに東京電力の管理下にある。

上信国境は、白砂山付近から僅かに 2km 程度の中央分水嶺を走った後、堂岩山を始点として分水嶺を離

れ、支稜を日本海側の谷へと下る。ハンノ木沢出合の少し下で中津川の源流セン沢を渡り、小泉三三角点(1938.9m)から来る大尾根へ駆け上り金山沢源頭の1950m 圏で合流し、高沢山の西の肩(1850m 圏)で中央分水嶺に復帰する。そこから始点へと中央分水嶺を辿って戻るには、野反湖を反時計回りに巡り、高沢山、弁天山、八間山と尾根通しの経路となる。ここには尾根に絡んで一般登山道が付いている。越境区域の面積は約14.54 平方 km である(下図の青枠で囲んだ明るい緑の区域)。



図1 野反湖の群馬県越境区域(明るい緑は群馬県越境域、暗い緑は古図の上州越境域)

出典: 国土地理院 5 万分の1 地形図「岩菅山」

信濃川水系にはみ出した区域については、古来どこまでが上州なのかが問題になってきた。群馬県の入山から長野県の切明まで、直線距離にして約 18km のあいだ集落がなく、両村を結ぶ草津街道は、溪の遥か高みをトラバースする横手道や支稜上の尾根道となっており、陰谷の流れに沿う道もなければ目印となる地形もない。どこで県境を越えるのかは甚だ不明瞭である。地形図を見ると、県境はセン沢を中途半端な位置で横切っている。明確な目標物がない奥深い山中の国境裁定は、揉めるのが常である。幕府が作成させた元禄国絵図(元禄 15 年、1702 年、図 2)を見ると、上野国図では野反湖から魚野川に掛けてが上州領、信濃国図では大(ダイ)倉山までが信州領となり、多少の曖昧さがあるものの、大倉山を国境とすることで概ね一致している。

しかし魚野川はどちらの図にも含まれていて、上州図ではセン沢出合から水源まで、信州図ではほぼ全域が含まれるも水源が上州に属するようにも見える曖昧な消え方をしている。今と変わらず当時も地図作成は担当役人の実地調査により行うものであり、決して伝聞情報のみを根拠に行うものではなかった。従って担当者が立ち入れない道なき深山には調査が及ばず、遠方から目視した山の様子や聞いた話を元に適当に山川を配置する形でぼかして作図するしかなかった。その結果、上州側からのみ山道による地元民の出入りがあった魚野川上流は、自ずと上州領として作図されたのであろう。



図2 元禄国絵図が示す上州界(左)と信州界(右)



図3 文化および安政年間の上野国絵図



幕末近くの上野国絵図(図3)にはより詳しく描かれ、魚野川の支流黒沢に「黒沢」、セン沢の支流北沢に「大倉沢」の字名が入った。信州側も、魚野川を含むことに変わりはなかったが、川が明確に国境で消え水源が上州側であることを示す図になった(図4)。

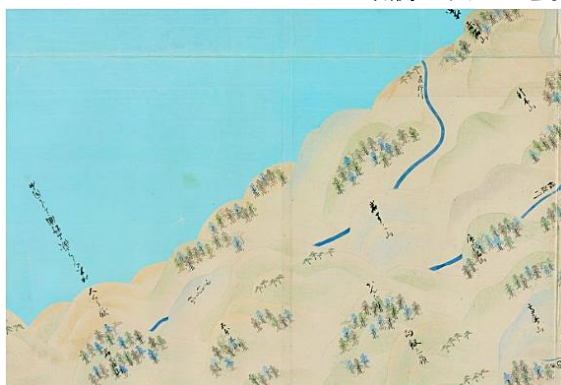


図4 天保年間の信濃国絵図

山については、両国の図に大倉山が境界と明記されているが、大倉山から下りて来る国境がどこでセン沢を渡るかは明らかでない。注意すべきは、当時の山が大倉山と呼ばれていたかである。正確な地形が把握されていなかった江戸時代、諸文書から大倉山は上信国境をなす大きな山であったと読み取ることが出来、大倉山を清津川の水源とすることからして白砂山付近を指していたと見られるだろう。信州秋山と上州入山

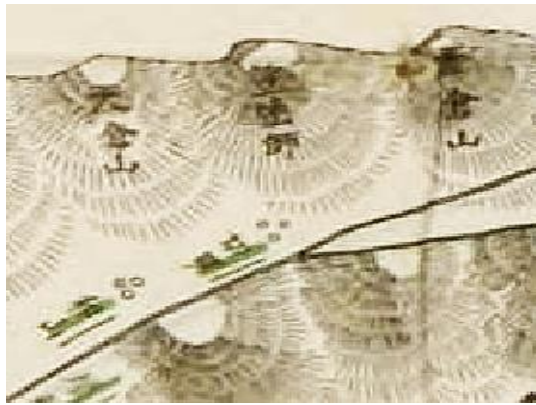


図5 信濃明細全図

を結ぶ山道の草津街道は白砂山から現在の大倉山に続く尾根を越える付近が最高点であり、それ以後野反湖へと下っていくことから、白砂山～堂岩山～現在の大倉山の尾根が国境と考えられていたのは自然なことである。魚野川とセン沢の合流点近くに落ちるこの尾根を国境とするも、一方魚野川は少なくともセン沢合流付近は間違いなく信州分であり、信州側に合流部を含むよう国境を引く必要もあった。そのため国境は中途半端な山中に置かざるを得ず、このことが国境を明確に定められなかった主因と思われる。魚野川の帰属も、源流部が上州に属する点以外は不明なままであった。国境付近の村は、上州が入山、信州が秋山郷であり、狩猟・漁労を生業とする小規模な寒村のため、利権を争う必要なく共存していた。従って、住民にとっては国境を明確にする必要がなかったものと推測される。

そこに波紋を投げかけたのが、松代藩士の佐久間象山であった。文化十四年(1817年)の訴えで野反池が上州に属すとの裁定が行われたが、嘉永元年(1849年)に松代藩利用係(現代風に言えば開発課)として現地を訪れた象山は、信濃川水系のこの池は信州領とするのが道理であると憤慨し、裁定を覆そうと帰宅後古文書を調べた。しかし上州の古図では上州領となっており、また信州領であることを示す文書が見つからなかったもので、これ以上追求しても徒労に終わるだろうと感じ、それでも諦め切れなかったと見え、野反池を記入した上野図は公的に発行されたものではなく、しかも三、四十年前のものに見え大して古くないとか、難癖をつけていた。恐らくその後と思われるが、象山は魚ノ川までが上州であることを承知の上、六合村の庄屋を騙して信州に編入させたことが、上州入山村に伝承されている。象山の一連の活動の影響は、野反湖付近の県境裁定と用益とに、後代にまで波及することとなった。

明治時代になると政治や行政の組織体制は大きく変わったが、県境に関する状況はあまり変わらず、相変わらず正確な地形図なしに絵図による管理が行われていた。長野県地図では大倉山～笠法師が県境となり、魚野川は源流が県外とされていた。明治12年の「堺村山銘細調簿」では、笠法師が村内にあり、大倉山が県

境とされた。明治の中頃になると、少しずつ状況が動き始めた。測量技術はまだまだ不十分であったが、地図に近代的な図法が導入され始めたのである。明治20年、陸軍外局の陸地測量部がケバ図法による20万分の1輯成図を作成した(図5)。

だが測量によらず、山間部では幕府の国絵図などを編集して作成したものであったため、地元の木こり、猟師、漁師等しか踏み込まない山

奥の地形は、甚だあやふやなものであった。野反湖周辺においては、白砂川、清津川のような大きな川が認識されておらず、秋山郷から入山村に県境を越える草津街道はセン沢に沿うのではなく、酷く歪んだ位置に描かれた魚野川を通るようになっていた。県境を成す大倉山が図上のどこになるかも分からぬほど不正確な地形表現ではあったが、とにかく初めて地図上に県境が明示されたのである。さらに明治22年に、農商務省により初めて等高線入りの実測図が発行された(図6)。三角測量はまだ導入されていなかったが、国有林管理のため山林局が明治15年以降実地調査を始めた成果が反映されており、絵図や古文書に頼った集成図である陸地測量部図と並べ、県境付近など山岳地帯の精度が明らかに上がっている。陸地測量部図に示されていなかった清津川が初めて図示されたが、白砂川は依然として図上には現れていなかった。

正確な測量を経たものではないにせよ、これらの地形図により初めて上信国境すなわち群馬と長野の県境が図示された。全国の県境の基礎ができたのは明治6～24年頃とされるので、ちょうどこの頃である。野反湖付近では、信濃川水系で帰属に曖昧さがあった魚ノ川流域が、長野県に属することが決定的になった。しかし現在長野県に含まれるセン沢右岸の大倉山は、依然として県境のままであった。例えば、陸地測量部の明治40年の測量記録に記された「大倉山」三角点の住所は群馬県の「六合村大字入山字大倉」(現在は長野県山ノ内町)、対岸の「小泉」三角点(1938.9m)の住所は「六合村大字入山字小前」(現在は長野県栄村)であった。同一地点に対する地籍が、長野県と群馬県とに重複して存在していたのである。「大倉」「魚ノ川」の小字は、平成22年の合併で六合村が消滅するまで存続した。もっともこれらは合併時に群馬側の「根広」に統合されたので、理論上の話だが、現在も中之条町根広地区は長野県内の「大倉」「魚ノ川」を含んでいることになる。さらに正確な地形図の刊行は、大正3年初版の5万分の1地形図を待たねばならなかった。初版5万図を担当した技官は、上信県境をどこに引くべきか大いに悩んだに違いないと想像される。その時点で刊行されていた20万図は、県境付近の詳細な地形が全く出鱈目で当てにで

きず、しかも県境がセン沢を渡る付近は特徴的な地形や目印となるものがない。現在の地形図に見られる不自然な県境の位置は、20万分の1輯製図の雰囲気汲

み取りながら、やむを得ず担当官がそれらしく引いたものであると考えるしか、納得できる理由が見当たらないのである。

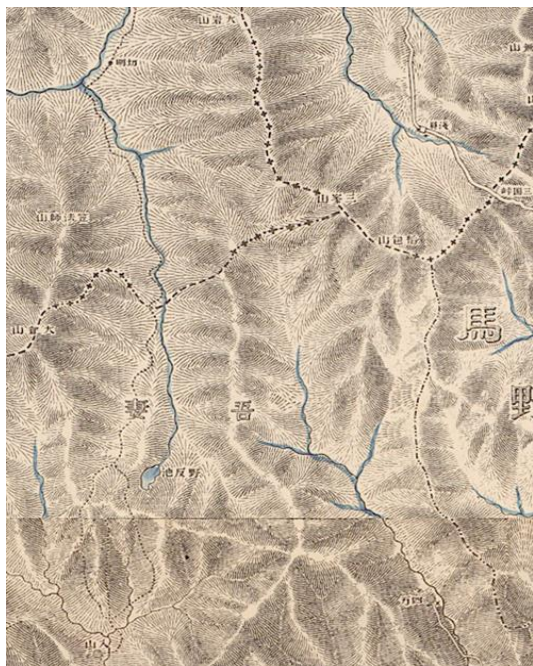
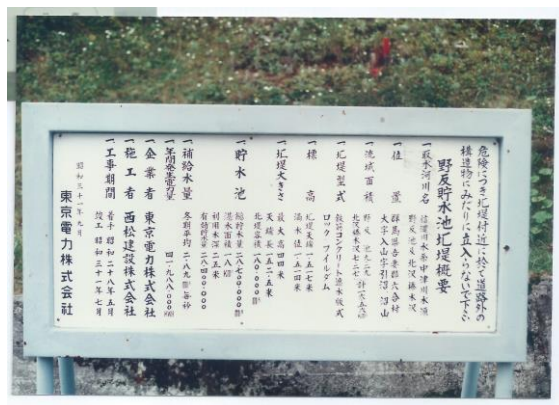


図6 明治20年頃の20万分の1地図(左陸地測量部、右農商務省)

ところで、なぜ上州が中央分水嶺を超えて北に張り出していたのであろうか。上信国境の地誌を研究した登山家・木暮理太郎は、「大倉山は二千五百四米の大倉山と同じものであることは疑なきことであって、入山村の住民は此附近まで盛に山稼ぎに入り込み、一時は此あたりから岩菅山へかけても自村に属するものと思っていたらしい。」と述べている。魚野川には、少なくとも昭和初期まで幾つもの入山村住民の小屋が掛かっていた。セン沢と魚野川の出合付近には長平の住人の小屋があり、黒沢出合付近には田代原の猟師が、コゼン沢出合の少し下の後河原小屋は小倉の者が小屋を設けていた。セン沢の右岸に通ずる草津街道の他、小倉から大高山の西を越えコゼン沢を魚野川へと下る漁師道も存在した。

入山村衆が分水嶺を越えてまで魚野川に出向く理由は、イワナを収穫し草津温泉へ売り収入を得ることであった。草津温泉では湯治客の滋養に資するため魚が極めて貴重であり、高値で取引されたという。信州志久見村の秋山衆までもが、獣道然とした草津街道を通して川魚を草津へ納めていたという。魚野川の川割りとは、下流から黒沢までが秋山分、上流側が上州分となっていた。この川割りは、イワナ漁を専門とする漁師がいなくなる昭和四十年頃まで続いたという。僅かな痩せた耕地の上で暮らす山村の暮らしは、想像を絶する厳しさで、飢餓により廃村になったとの話も珍しくない。生活を支えるための、山も川も国境もなく、木を伐り、山の幸を集め、魚を獲る彼らの活動が、自然と地域の境界となった一つの事例であろう



(左)野反湖の案内図

(右)野反湖の概要

山行報告

関東ふれあいの道 埼玉⑫

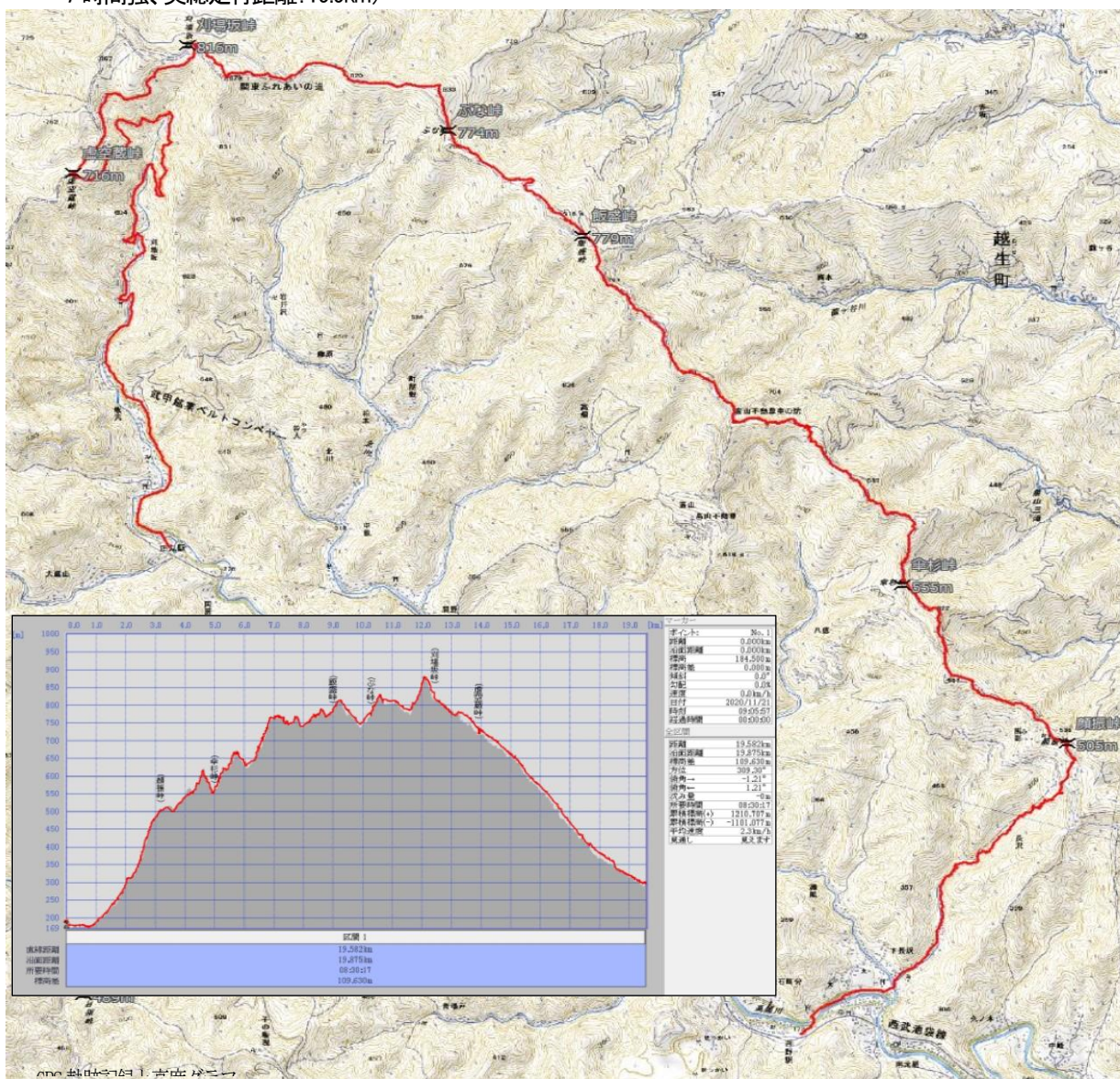
グリーンラインに沿ったみち

渡辺 真一

2020 年 11 月 21 日(土)快晴

参加者: 今井、鎌田、近藤、渡辺(敬称略、計 4 名)

コースと時間記録: 吾野駅 9:10~9:20 下長沢~10:20 風影(ふかげ)10:27~10:40 顔振峠 10:47~11:20 (622m ピーク)~11:30 傘杉峠 11:37~12:25 車道から稜線に藪漕ぎ 12:45 稜線~13:10 関八州見晴台(昼食)13:53~14:24 飯盛峠 14:28~14:50 ブナ峠 14:52~15:00(833m 峰)~15:30 ツツジ山 15:35~15:42 刈場坂峠 15:47~16:08 虚空蔵峠 16:13~17:05 子の神戸(正丸峠/正丸駅分岐)~17:30 正丸駅(総走行時間: 7 時間強、実総走行距離: 19.9km)



GPS 軌跡記録と高度グラフ

快晴の秋の朝、吾野駅に 4 名が集合。吾野宿から国道の下をぐって学校の横を上り下りして下長沢に出るガイドの通りのコースではなく、国道から直接下長沢に向かった。最初は林道に沿ったなだらかな道だが、植林地に入ると坂は角度を増していく。薄暗い樹林帯を息を切らせながら登っていくと一気に景色が開ける部落、

風影(ふかげ)へ飛び出す。北側がすっぱりと切れた武甲山が近い。富士山も御前山の左側に見える。丹沢山城全体が見え左端には大山が美しい。あとひと登りすれば顔振峠である。ここからはしばらく車道を歩く。途中から車道を外れ、622m ピークを経て傘杉峠に到着。前回より 30 分早い到着である。傘杉峠から黒山三滝へ

の入口には未だに入山禁止の看板が置かれている。ここを登りのコースとして検討するのにネットで調べると、途中まで歩いた人はいたのだが、歩き通したと言う記



写真1 吾野駅よりこれから出発



写真3 顔振峠のいわれを書いた碑

この関東ふれあいのみち埼玉⑫「グリーンラインに沿ったみち」の案内に示されているのは、走行距離22.0km、所要時間8時間10分というものである。このコースは、前半がちょうど1年前の同時期である11月16日に8名で実施した⑪「義経伝説と滝のあるみち」で、吾野駅から顔振峠に登りグリーンラインを通って傘杉峠に到るルートと重複している。さらに、後半部分が今年の2月29日に4名で実施した④「峠の歴史をしのぶみち」の刈場坂峠から白石車庫までのコースと重複している。従って、今回で初めて歩くグリーンラインはこの傘杉峠から刈場坂峠までの8.2kmである。今回の計画は、この後半を省略する形で実施をしたのだが、実際にはオリジナルとさほど変わらない距離を歩く羽目になってしまった。これは企画者のコース設定が甘かった。実際、刈場坂峠から正丸駅までの距離約7km、標高差約500mは、下りとは言え1時間半ほどの車道歩きが実に長かった。また、グリーンラインに沿ったみちはグリーンラインに沿った山道を歩くのかと思うと、そうとばかりは言えず、車道を外れて山道を上り下りさせられたら直ぐに車道に戻ってしまい車道を歩いた方がずっと早かったり、かと思うと延々遠回りをして車道を歩かされるコースが設定されていたりとあまり統一性がなく、標識もきちんと整備されていないところが多かった。基本的には、関東ふれあいの道の看板に従って歩いたのだが、つい見落としてしまった部分もあった。しかし、この時期、

録は見当たらず、道を失い引き返した記録しかなかった。



写真2 風影部落手前の樹林帯の登り



写真4 傘杉峠記念写真

昨年の大雨の影響でグリーンラインはあちこちで通行止めになっており、通行車両が少なかったのは幸いであつた。

傘杉峠からはまたしばらく車道歩きである。昼飯の時間が近くなり腹も減ってきた。ところが、途中で地図を見ていた今井さんが「このまま車道を行くと関八州見晴台にはいかないぞ」と言うので、稜線に出るために藪漕ぎをした。近藤さんには少々応えたらしい。ペースが落ちて見晴台に着いたのは13時を過ぎてしまった。何はともあれ飯をかき込み空腹を満たす。関八州とはどこを指すのか？調べてみると関東8か国の総称で、相模(神奈川)・武蔵(東京、埼玉南部)・安房(千葉南部)・上総(千葉中央部)・下総(千葉北部)・常陸(茨城)・上野(群馬)・下野(栃木)を指しているとのこと。近藤さんはここで別れて見晴台から高山不動尊を経て吾野に下ると言うのでそれを見送り、次の飯盛峠に向かう。このグリーンラインは、奥武蔵の500m~900mの山々の稜線をつないでいくのであるから正に「峠のみち」でもある。ちなみに顔振峠:505m、傘杉峠:555m、関八州見晴台:771m、飯盛峠:779m、ブナ峠:774m、ツツジ山:879m、刈場坂峠:816mと少しずつ高度を上げていく。ちなみに虚空蔵峠は716m、大野峠は855m、白石峠は757mであり、このグリーンラインの峠としては大野峠が最も標高が高い。



写真5 関八州見晴台にて全員の記念写真



写真6 飯盛峠

飯盛峠の次はブナ峠である。木ヘンに義と書いて「ブナ」と読ませるらしい。この辺りはコースタイムよりも速いペースで駆け抜けた。昼が短いこの時期、山道で暗くなるのは避けたい、すなわち暗くなる前に安全な場所に到達しなければならない。気ばかり焦るが足がなかなか前に進まない。ブナ峠からは標高を徐々に上げていく。西日が大きく傾く頃、道中最高峰 879.1m のツツジ山に到着した。午後3時半だった。ツツジ山からは正丸峠への道標があったが、地図にはその道は記されておらず、進入することは避けた。ツツジ山を下って刈場坂峠に到着、もう午後4時に近い時間だった。刈場坂峠の先の牛立久保を経て虚空蔵峠へ下るルートも考えられたが、周りはすでに薄暗くなり始めたので、この先は遠

くても車道に行くことに。以前の逆ルートで刈場坂峠から虚空蔵峠に下ると、一人でショベルカーで工事をしている人がいて、東屋でお茶をしながら少し話をした。土砂崩れで出た土をここに埋めているようだった。虚空蔵峠からの車道は想像以上に長く、ほとんど疲れたが、1時間半近くを何とか歩き通した。正丸駅に着いたのはすでに午後5時半。お陰で壊れかけの私の膝はすっかり壊れてしまったようで、動くのもおっくうなくらいだった。正丸駅では、今井さんが持参したワインを頂きながら電車を待つ。そして飯能に移動して、一人2品プラス生ビール980円を有効に使った反省会を持ち、解散となった。



写真7 ブナ峠



写真8 奥武蔵グリーンラインの説明板



写真9 刈場坂峠手前のツツジ山(879m)



写真10 刈場坂峠 (818m)



写真 11 コース案内板



写真 12 虚空蔵峠の標識



写真 13 午後5時半ようやく正丸駅に到着

廃れの系譜 ⑦

廃隧道 その 1

廃道・廃線のシンボリック的存在に廃隧道がある。Tunnel はフランス語で「樽」の意があるそうだが、形状から筒状のものを表すイメージからきているようだ。ここでは「廃トンネル」より「廃隧道」としたほうが廃れのイメージに近い。

道路隧道と鉄道隧道の専門的な構造や機能の違いはさておき、大雑把には 出入口の「坑門」とそれを繋ぐ「坑道」が、自然地形の中に人工的構造物として存在しているわけで、道か線路、あるいは水路などと共に運命を共有している構造物ではあるが、なぜか隧道の坑門には、不思議な魅力を感じるのである。



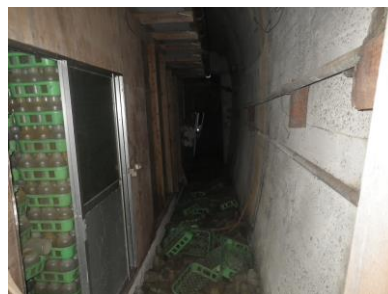
水根線 中山トンネル

奥多摩の水根貨物線跡の廃隧道を調査したことがあった。水根貨物線は氷川駅(現・奥多摩駅)と水根作業所(小河内ダム建設現場)間約7km の資材輸送のために東京都が敷設した専用小河内線のことで、将来電化

近藤善則

可能な設計で昭和 27 年に開通した。昭和 32 年に小河内ダムが完成後、西武鉄道に譲渡、現在奥多摩工業が所有しているが、観光路線としての計画は消え、廃線となってしまった。隧道 23ヶ所、橋梁 23ヶ所が所々当時のままの姿で残っており、路線に沿って整備された「奥多摩むかし道」から観察することが可能だ。

だがこの先、この廃れた隧道はどうなっていくのだろうか？ 地図にも残らず、その存在も消えていくのか？ あるところでは、数十年放置されたトンネルがビアホールとして甦ったり(愛岐トンネル)、ワイン貯蔵施設(勝沼)となったところもあるようだが、ほとんどは放置されたままのところが多いのではないかな。



第二氷川トンネルのきのこ栽培施設跡

ちなみに水根線の第二氷川トンネルでは「きのこ栽培施設」として利用してみたが数年で閉鎖した。いまその残骸が無造作に残っていた。(つづく)

AGC レポート vol-75 2021 年 6 月 30 日発行
発行: 公益社団法人 日本山岳会 山岳地理クラブ
〒102-0081 東京都千代田区四番町 5-4 日本山岳会 気付
TEL 03-3261-4433 FAX 03-3261-4441
編集担当: 近藤 E-mail: yoshi-kondo@com.home.ne.jp